

群馬県高崎市文化財発掘調査報告書第116集

高関堰村遺跡

都市計画道路 3.3.9 (環状線)

建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 4 年

群馬県高崎市教育委員会

序

群馬県西部に位置し交通の要衝として繁栄を続けてきた高崎市は、西暦2000年に市制100周年を迎える全国唯一の都市であります。

平成3年度からスタートした第3次総合計画に基づき、21世紀を見据えた計画的な都市基盤と都市機能の整備を推進しています。その目標に向け、秩序ある地域の開発を基本に据えて、新幹線や高速道の充実に合わせ、その高速交通網との連結を十分に配慮したネットワーク型の都市構造を目指した都市の骨格づくりを積極的に推進しています。

また、高崎市は古来から受け継がれた個性ある文化、伝統のある街です。特に、今まで確認された数多くの史跡や遺跡が物語るように、群馬県西部は県内はもとより関東地方においても異彩を放つ地域であり、高崎市はその中核として位置付けられております。

高速交通網体系への対応をはじめとした開発の流れの中にありながらも、埋蔵文化財の調査が着々と進められ、古代史の宝庫として任ずる高崎市の歴史に、それを裏付ける頁がさらに追加されていきます。

高関堰村遺跡は、全線開通に一部を残すのみとなった環状線道路築造工事に伴い実施された発掘調査により明らかになった遺跡です。当調査により、高関地区では初めての発見である弥生時代中期後半の集落にめぐらせた環濠を発見しました。併せて中世から近世にかけての館の一部やその館に接するように掘られた堀を確認し調査。周辺からは当時の建物・井戸・墓が発見され同地区の生活様式変遷の研究に役立ちました。

最後に、発掘調査実施について御協力、ご指導を賜った関係諸機関の方々に深くお礼申し上げますとともに、発掘調査から報告書作成まで当った調査担当者の労をねぎらい本報告書が地方史解明に少しでも役立つことができれば幸いです。

平成4年3月

高崎市教育委員会 教育長 茂田 治男

例 言

1. 本書は群馬県高崎市都市計画道路3.3.9環状線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査概報である。
2. 遺跡の所在地 高崎市高岡町88、91番地他。
3. 発掘調査組織 高崎市教育委員会文化振興課埋蔵文化財係
＜事務局＞ 石井忠樹 土屋秀夫
＜調査担当＞ 関口 修 鷺谷亨信
4. 調査期間 ＜発掘作業＞ 1991年9月30日～ 10月28日
＜整理作業＞ 10月29日～92年1月13日
5. 発掘調査にあたって土屋喜英氏（高崎市文化財調査委員）に貴重なご助言をいただいた。
6. 発掘調査にあたって、基準点測量は有限会社グリーン測量設計、表土掘削は井上総合リースに委託した。

凡 例

1. 本遺跡のテフラの略号、年代は以下のとおりである。
As-B 天仁元年（1108）
As-A 天明3年
2. 図版の破線は擾乱部である。
3. 北は座標北である。
4. 土壌の色は標準土色帖によった。
5. 遺構の略号は以下のとおりである。
SD 溝、堀
SB 掘立柱建物
SK 土坑
SE 井戸

I 調査に至る経過

高崎市は市街地の周りをめぐる環状線の建設を進めて来た。今回発掘する地点は既に完成している国道354線と食賀野17号バイパスの中間点である。

都市計画部街路課が道路建設予定地は競馬場遺跡、上中井辻薬師遺跡などに近接しており遺跡の存在は確実であった。担当と協議の結果調査を開始した。

II 調査の方法

(1) 調査の方法

発掘地点は中央部に生活道路が走っておりこの道路の通行を阻害することなく進めなければならなかった。

調査区はⅠ～Ⅴ区までに分断して行った。この辺りは地下水位が高く常時水中ポンプで排水しながら調査を進めた。

(2) 調査の経過（日誌抄）

9月30日 準備完了
10月2日 掘削開始 近世の堀検出
10月4日 堀にかかる橋の痕跡確認
10月14日 Ⅱ区で建物跡検出
10月15日 弥生時代の環濠検出
10月21日 Ⅰ区で井戸確認
10月22日 Ⅰ区で建物検出（近世）
10月28日 調査終了

III 遺跡の土層

1
2
3
4
5
6
7

1. 表土。
2. 灰褐色土層、As-A（浅間山給源、天明3年、1783）を含む砂質土。
3. 褐色土層、As-B（浅間山給源、天仁元年、1108）を含むシルト質層。
4. 暗褐色土層、As-C（浅間山給源、4世紀中頃）を含むシルト質層。
5. 暗褐色土層、シルト質層（Ⅳ区の弥生時代遺構の覆土）
6. ロームへの漸移層。
7. 黄褐色土層、ローム層。

第1図 土層図

IV 周辺の遺跡

旧石器時代

八幡中原、雨壺遺跡で石器出土。大八木地区でもポイントが表採されている。

縄文時代

大八木、宿大類地区の井野川流域、鳥川流域でも小規模ながら調査されている。

弥生時代

中期では南西の競馬場遺跡が名高い。後期は鈴ノ宮遺跡、西島相ノ沢遺跡などがある。

古墳時代

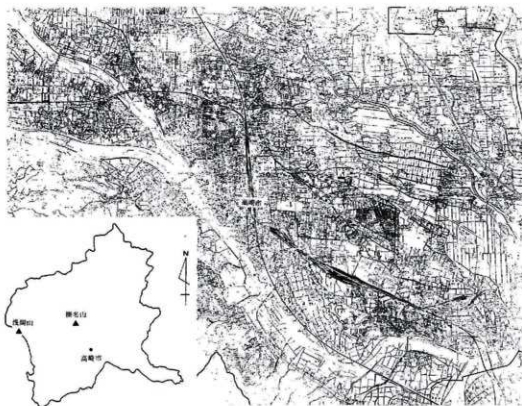
元島名將軍塚古墳、大鶴巻古墳、浅間山古墳などの前期大形古墳が近くに存在する。また、水田跡が新保、上並根、浜川地区などで検出されている。

奈良、平安時代

集落が人規模に見えられている。また平安末の水田は高崎市では多数調査されているが近くでは柴崎、高岡、下中居、などがある。

中世、近世

南の上中居辻薬師遺跡は中世から近世まで機能していた周りに堀を巡らす館である。



第2図 周辺の遺跡

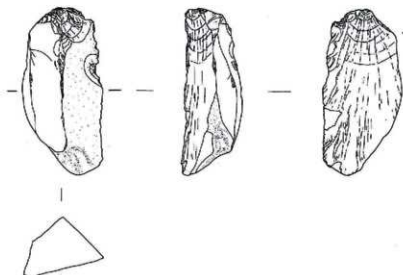
A. 本遺跡（高岡製材遺跡）

- | | | |
|-------------|--------------|--------------|
| 1. 競馬場遺跡 | 2. 下佐野遺跡 | 3. 舟橋遺跡 |
| 4. 竜見町遺跡 | 5. 高崎城遺跡群 | 6. 市遺跡 |
| 7. 上並根遺跡群 | 8. 引間遺跡 | 9. 林製作所遺跡 |
| 11. 西島相ノ沢遺跡 | 12. 宿大類遺跡群 | 13. 鈴ノ宮遺跡 |
| 14. 元島名遺跡 | 15. 元島名將軍塚古墳 | 16. 大鶴巻古墳 |
| 17. 浅間山古墳 | 18. 下中居桑里遺跡 | 19. 上中居辻薬師遺跡 |

V 検出した遺構

1. 縄文時代

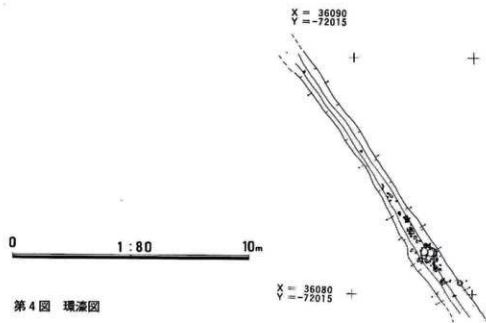
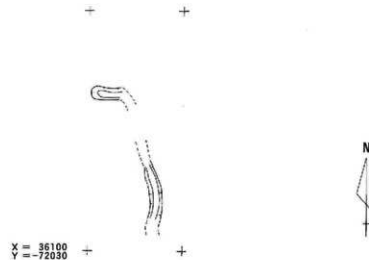
今回の調査では、縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物についても、土器の破片などは見つかっておらず、下図の石核のみである。石材は安山岩系、長さ17.3cm、幅8.3cm、厚さ5.3cmである。遺構と遺物が伴わないうえ、今回出土した遺構とも時代がかけはなれており、周辺の地域での調査で縄文時代の集落が確認されていないことから、今後周辺の地域での調査をするときには、十分な注意が必要となるであろう。



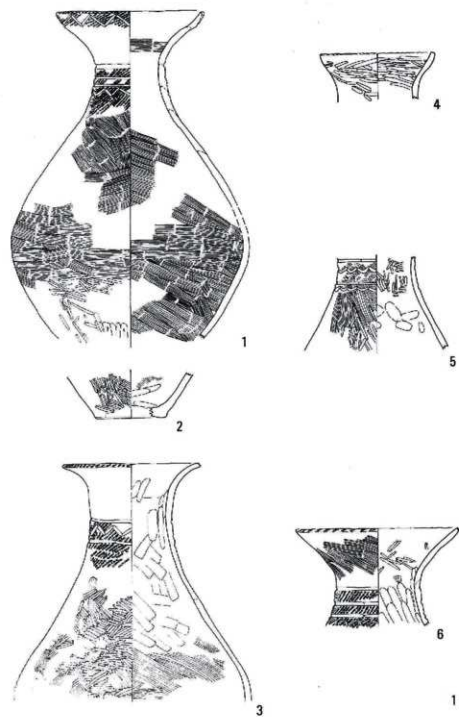
第3図 遺物図

2. 弥生時代

8号溝（SD8） 弥生時代の遺構は、Ⅲ区・Ⅳ区・Ⅵ区で検出された8号溝（SD8）である。上端幅1.10m、下端幅0.18mのV字形を呈する溝である。深さは約0.5mを測る。上端の標高は90.30m、下端の標高は89.80mである。Ⅳ区で確認された8号溝は、N-33°-Wで北西に走り、Ⅲ区ではほぼ真北方向を変え、Ⅵ区で真西を向き、そこでとぎれる。遺物はⅣ区以外では出土していない。Ⅳ区でも南東角の部分で、上端から20cm下の間に堆積する浅間C軽石を含まない層からそのほとんどが出土している。土器等の特徴から弥生時代中期の溝と考えられる。この地域で弥生中期の遺構が見つかったのは初めてであり、今後この周辺の調査には十分な注意が必要である。

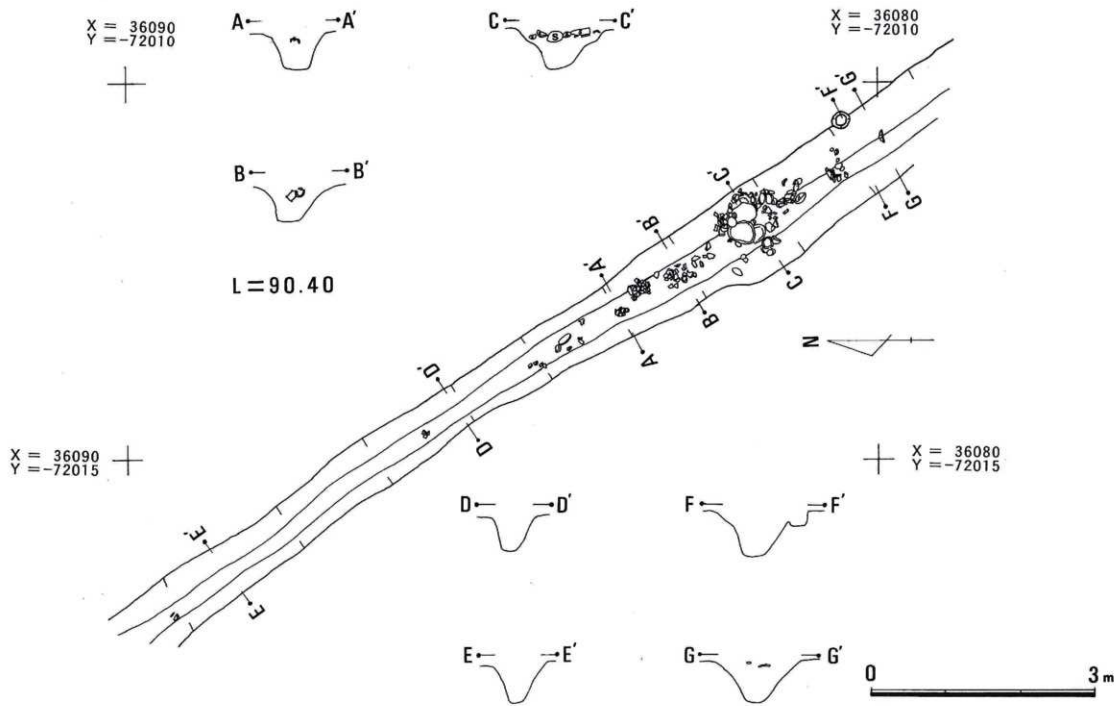


第4図 環境図

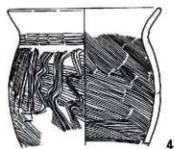
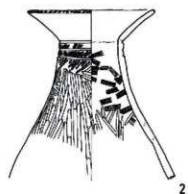
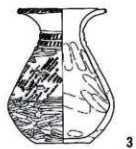
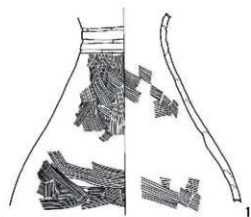


1:4

第5圖 遺物圖



第6圖 環濠IV圖



1:4

第7図 遺物図



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11

1 : 4

第 8 図 遺物図

器種	図番	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	形態・調整の特徴	文様	備考
壺	PG-01	口径15.5 胴径25.0	粘土 やや密 細砂を含む 焼成 やや良	7.5YR6/3 にぶい褐色	受け口状口縁。胴部・胴部に向かい広がって、胴部輪花文彫。最大径のやや上。胴部の張り出しを、胴部へハケ調整。胴下部へハケ調整。胴部へハケ調整。	口唇・口縁・胴部に縄文。胴部に縄文文様。3本の縄文。さらに最下位の縄文下に山形文を施す。	1/4残存
甕	PG-02	底径 7.4	粘土 やや密 細砂を含む 焼成 やや良	7.5YR6/3 にぶい褐色	平底。胴部輪花文。外面へハケ調整。内面へハケ調整。ゆびナデ。	不 明	1/2残存
壺	PG-03	口径14.5 (推定)	粘土 密 細砂を含む 焼成 やや不良	7.5YR7/3 にぶい褐色	口縁大きく外反。胴部輪花文彫。胴部へハケ調整。内面上部ゆびナデ。胴部へハケ調整。	口唇部縄文。胴部縄文文様。2本の縄文とその間に山形文を施す。	1/6残存
壺	PG-04	口径12.2 (推定)	粘土 密 焼成 やや不良	10YR6/2 灰 黄 褐	胴部太い。外縁ともハケ調整。横方向へハケ調整。	口唇部に縄文を施す。	黒灰あり
壺	PG-05	胴径 8.2	粘土非常に密 細砂を含む 焼成 良好	7.5YR7/3 にぶい褐色	胴部から胴部にかけてゆるやかに開く。胴部へハケ調整。胴部へハケ調整。胴部へハケ調整。胴部へハケ調整。	胴部に2本の縄文。胴部文の下に山形文を施す。	1/3残存
壺	PG-06	口径17.0	粘土 密 細砂を含む 焼成 やや不良	7.5YR7/4 にぶい褐色	口唇やや外反。胴部やや太い。内面上部へハケ調整。胴部ゆびナデ。	口唇部に縄文。胴部に縄文文様。3本の縄文。最下位の縄文下に山形文を施す。	3/4残存
壺	PG-07	口径24.0	粘土 密 細砂を含む 焼成 不良	7.5YR7/2 明 褐 灰	胴部から胴下部までゆるやかに開く。胴部の張り出しが少なく、無文彫。胴部へハケ調整。内面へハケ調整。	胴部に3本の縄文。	1/3残存
壺	PG-08	口径13.2	粘土 密 細砂を含む 焼成 やや不良	7.5YR6/3 にぶい褐色	口縁外反。胴部無文彫。胴部輪花文へハケ調整。	口唇部に縄文。胴部に縄文文様。3本の縄文を施す。	1/3残存
壺	PG-09	口径 9.2 器高14.3 底径 5.5	粘土 密 細砂を含む 焼成 やや良	10YR5/4 にぶい黄褐色	無文彫の小形壺。口縁大きく外反。胴部へハケ調整。内面へハケ調整。	胴部縄文文様。3本の縄文を施す。	9/10残存 (ほぼ完全)
甕	PG-10	口径16.2 (推定)	粘土 密 細砂を含む 焼成 やや不良	7.5YR5/3 にぶい褐色	口縁外反。外面ゆびナデ。	胴部左寄り等間隔止の縄文。胴部へハケ調整。縦方向に縄文状文。胴部左寄り等間隔止の縄文。	1/2残存 黒灰あり
台付壺	PG-11	口径10.0 器高 9.8 台径 6.0	粘土 密 細砂を含む 焼成 やや不良	7.5YR5/4 にぶい褐色	台付壺。口縁やや内湾する。胴部ゆびナデ。胴部ゆびナデ。胴部ゆびナデ。胴部ゆびナデ。	胴部右寄り等間隔止の縄文。胴部へハケ調整。縦方向に縄文状文。胴部右寄り等間隔止の縄文。	完 形 黒灰あり

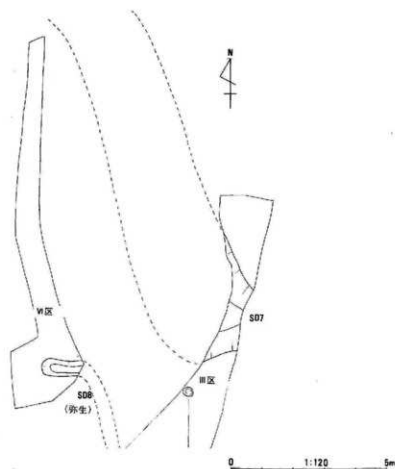
器種	図番	法量 (cm)	胎土 焼成	色 調	形態・調整の特徴	文 様	備 考
壺	P8-01	底径 7.1	胎土 密 細砂を含む 焼成 やや不良	7.5YR7/2 灰 褐 灰	平底、胴部廣く。 外面朝かい東方へつ磨き。 内面横方向へつ磨き。	不 明	底部 1/2残存
壺	P8-02	底径 8.5	胎土 密 細砂を含む 焼成 不良	7.5YR7/2 灰 褐 灰	平底、胴部に向かいやや大きく 廣く。 外面朝下直へつ調整後、東方向 へつ磨き。 内面ハタ調整、底面コナチ。	不 明	底部 1/3残存
壺	P8-03	底径10.0	胎土 密 細砂を含む 焼成 不良	7.5YR8/2 白	平底、胴部廣く。 外面ハタ調整。 内面、器底直下のため不明。	不 明	底部 1/4残存
壺	P8-04	胴径16.5 (推定)	胎土 やや密 細砂を含む 焼成 不良	7.5YR4/2 灰 褐	口縁のく外反、胴部やや狭い。 内面に東方を器底直下を直文。	胴部に右向き横状文を直文。 器底に東方を器底直下を直文。	1/8残存
高 杯	P8-05	口径18.0 (推定)	胎土 密 細砂を含む 焼成 良好	10YR4/6 赤	口部の杯蓋。 口部直下、杯蓋や直文。 内面横方向へつ磨き。	不 明	内外面 赤色塗彩 1/10残存
壺	P8-06	底径 4.8 (推定)	胎土 やや密 細砂を含む 焼成 不良	5YR7/2 灰 褐 灰	平底、胴部はあまり狭くない 外面ハタチ。 内面ハタ調整、器底コナチ。	不 明	1/3残存
甕	P8-07		胎土 粗 細砂を含む 焼成 やや不良	5YR4/3 にぶい赤褐	胴部やや太みをもち。 内面ナメ調整。	横線直状文、下直の字直文。	胴上部 1/8残存
壺	P8-08		胎土 やや密 細砂を含む 焼成 やや不良	5YR7/2 明 灰 褐	底の直線。 底の直線。	左向き横状文、右向き横状文。	胴部 1/4残存
壺	P8-09		胎土 密 細砂を含む 焼成 良好	7.5YR4/2 灰 褐	器の胴部。 内面直ハタ調整あり、内面ハタ 調整後、ナメハタ磨き。	外面ハタ調整後、横線直状文。 器底に直線直状文。	胴部 1/8残存
壺	P8-10		胎土 密 細砂を含む 焼成 やや不良	5YR7/2 明 灰 灰	底の胴上部、ハタ調整あり。 底の胴上部、ハタ調整あり。	ハタ調整後、東方向横線直状文。	胴上部 1/10残存
壺	P8-11		胎土 やや密 細砂を含む 焼成 不良	5YR7/3 にぶい緑	不 明	東方向横線直状文？	

4. 中 世

発掘対象地の北西ぶに東西の掘跡らしき埋もれた水路が走っていた。館の周囲を取り囲む堀
がその地点にあると考えられたのでトレンチを入れた。(第9図)

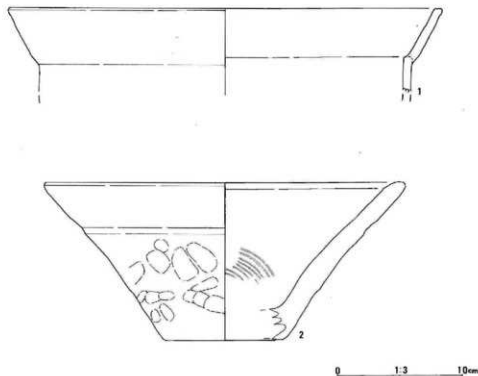
西側のトレンチが中世の堀があると考えられた場所であったが、堀跡は検出できなかった。
ここにあら小さい溝はV区から続いてくる弥生時代の環壕である。

東側のトレンチはごく一部の掘跡の検出である。15世紀後半のナベの破片が出土している。
西側のトレンチではこの掘跡が見つかっていない。おそらく破線のようにカーブを描いて堀が
めぐっていると考えられる。



第9図 中世掘図

SD7 III区で検出した。上幅2〜4メートル深さ50センチ程である。断面はゆるやかな船底形を呈する。狭い範囲の調査なので断定は差し控えたいが前述したように15世紀後半の時期の掘削の可能性が高い。出土した遺物は第10図のものである。1は瓦質のナベである。口縁が大きく発達し、体部は直線状である。底の部分はないがおそらく平底であろう。2は摺鉢である。大きく体部が開く。内側にややカブする跡目がある。



第10図 SD2出土遺物

器種	図・写真番号	法量 cm (推定)	胎土 a、焼成 b、色調 c、	形態・調整の特徴	備考
鍋	P12-01	口径(34.8)	a. 密、微砂含む。 b. 良好、僅し焼き。 c. 褐色。	口縁と胴の境に、はっきりした段をもつ。口唇端部はすり減っている。紐つくり、ロクロ整形。底部は平底と思われる。	1/8残存 SD7
摺鉢	P12-02	口径(29.0) 底径(9.8) 器高 12.5	a. 粗、小石を含む。 b. 不良、黒光面。 c. 灰色。	底が小さく、大きく口縁が開く。口唇端部に丸い。内面に8本単位の轆目がある。使用のため、磨り減っている。外面は指ナデ、指痕が明瞭。	1/8残存 SD7

5. 近 世

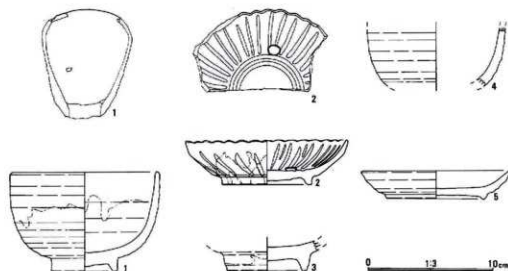
SD2 調査II区で検出した。北から南に向かってはしる堀である。II区の中央付近でやや西におれ、そのまま北に向かう。推定幅7m、深さは1m程である。堀の断面は台形である。橋状遺構SB1、溝SD5・6は同時期存在と考えられる。SD2の覆土の上部は現代遺物、中部はAs-Aを多量に含む土で、最下層はノ状の土であった。

遺物は17世紀から現代のものまで出土している。中世遺物はない。この堀がSD1と同時期にあったと考えられる。

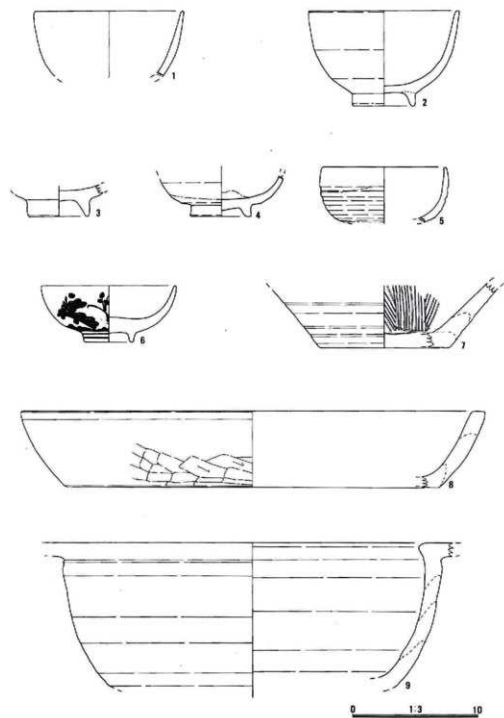
SD1 長野堀の分流に沿う形でII区、及びI区で検出した。直角にほりこまれており、断面はほぼフラットである。砂とシルトが互層になって堆積している。下部は水平堆積のままで上部は何度も砂が一度期に押し流されてきた状態である。

現在、この南に長野堀が東に流れる。この用水路に先立つものであろう。遺物は石臼がある。覆土中のAs-A、Bは砂の流れが強いめか明確でない。

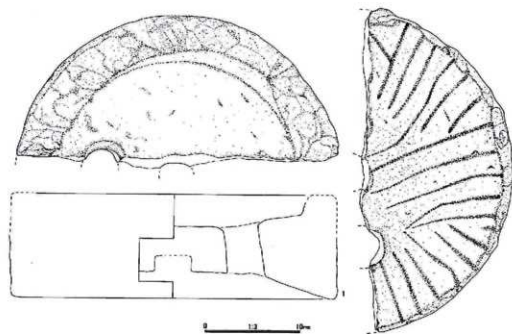
SD3 II区SD2からI区SD1にむかってはしる堀である。SD2と同時期である。I区西壁の地層観察ではSD3がかなり堆積した後SD1が掘り直された事がわかる。SD1の最初の掘削は中世の可能性があるが、この掘削は近世である。



第11図 遺物図

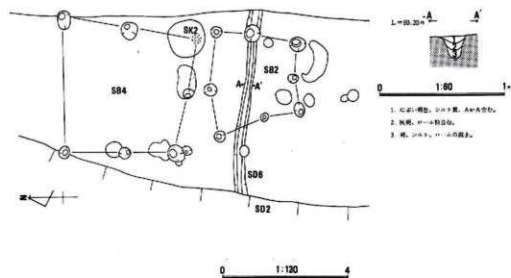


第12図 遺物図

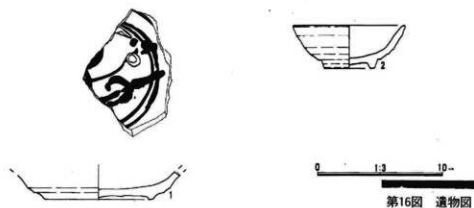


第14図 遺物図

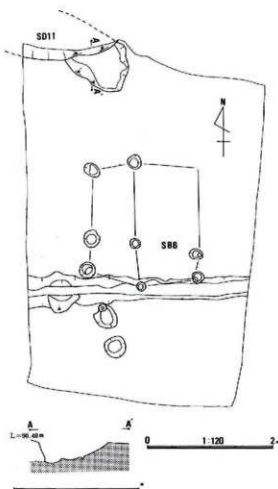
SD6 II区の北部、東西をはる細い溝である。西側のSD2につながる。SB2より古い。覆土中にAs-A（再堆積）がみられる。近世後期と考えられる。



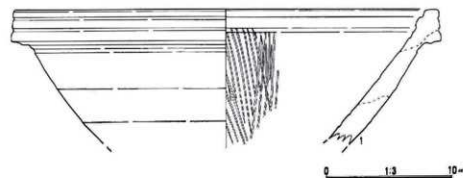
第15図 SD6 遺構図



SD11 V区の北西で検出。西にむかうと思われるが、大部分が道路下で発掘不可能なので規模は不明である。覆土中にAs-A軽石がまばらにみられる。第18図は摺鉢である。灰質系で、内面に使用のため摩滅が著しい。

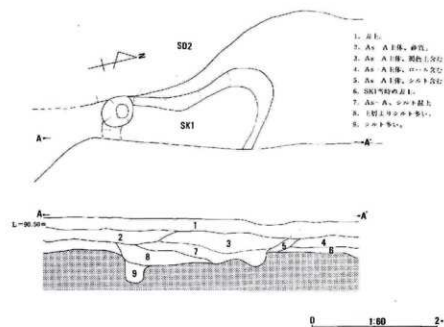


第17図 SD11遺構図

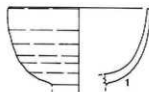


第18図 遺物図

SK1 II区、SD2の東に位置する。南北2.5m、深さ60cm程である。軽石が大部分であり、ローム粒と褐色土のかたまりが点々とある。As-Aを処理した土坑である。

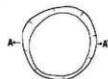


第19図 SK1遺構図



第20図 遺物図

SK2 墓である。SB4（建物）より新しい。円形で深さ50cm、下部西側には曲げ物（木棺）の一部が残存していた。覆土にはAs-Aが混入する。



SK2



第21図 遺構図



第22図 遺物図

掘建柱建物跡

SB1 II区、SD2の南部に位置する。SD2の肩部に3本の柱穴が並んでいる。南と北の2本の掘り方は深い、中央は浅い。第23図のエレベーション図に表れているが堀底の西よりややくぼみがある。これが柱をうけるものであれば、この遺構がSD2にかかる橋跡となる可能性が高い。

SB2 II区の北部でSB4の南に検出された。2間×2間の掘建柱建物跡である。形は北が広く南がせまい台形をしている。柱の位置は直線ではなく出入りがはげしい。柱穴とSD6は切り合っているが、SB2のほうが新しい。柱穴埋土の中にAs-A（浅間山結露、1783年）が混入している。建物は近世後期と考えられる。

SB3 IV区で検出した。柱穴が3本のみであるが、調査区外である西方に建物が広がっていきと考えられる。検出した3本の柱穴の内、中央の柱穴の上部にややかどばった安山岩がおかれていた。この石の上面は比較的天いである。礎石であろう。他の2本は石があったかどうかは不明である。柱穴の中はAs-Bが混入する褐色土である。As-Aはない。この建物は礎石の上につくられた中世の遺構の可能性が高い。

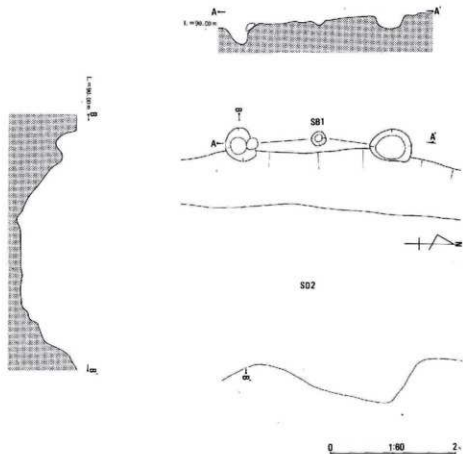
SB4 II区の北端、SB2の近くで検出した。北方が擾乱を受け北の中央の柱穴の存在は不明である。もし、この部分に柱穴があったら2間×2間の建物跡と考えられる。柱穴の埋土にはAs-Aが混入している。南東の柱穴はSK2（墓）にきられている。建物の時期は近世後期と考えられる。

SB5 III区で検出した。2間×3間の建物跡の一部と考えられる。南北の柱穴は直線であるが、東西は掘り方が浅く、また柱穴列も左右に出入りがある。中央部に浅い柱穴があるので、総柱の建物跡の可能性もある。はしらの穴にうもった土にはAs-Aが含まれている。近世後期とされよう。すぐ北のIII区の堀は中世のものであり、関連はない。

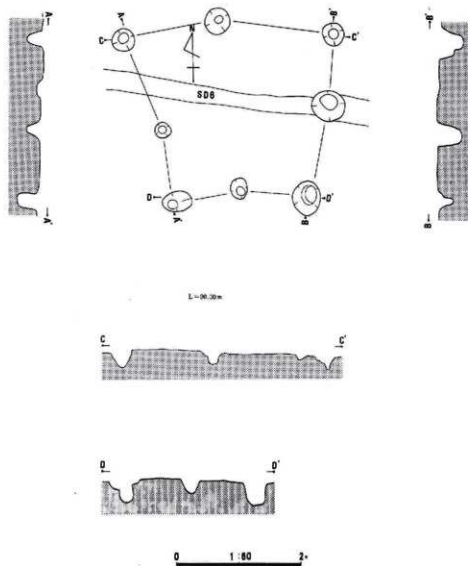
SB6 V区で検出した。2間×2間の総柱の掘立柱建物跡である。北東の柱穴は擾乱を受けなかった。南方の2本の柱穴は昭和の溝にきられる。柱穴にはAs-Aが混入する。これも、近世後期とされよう。柱穴の間隔は等しくない。南北方向でみると、中央の柱穴が南によっている。また、中央最南部の柱穴は極端に南にずれている。

SB7 I区で検出した。SB8と重なった位置にあるが、柱穴が切り合わないで前後関係は不明。柱の間は南北が2、東西が7間、他の建物跡に比べ、きっちりとした長方形である。東西方向の柱穴の間隔はさまざだが、一直線上に並ぶ。柱位置にある掘り方は20cmで土を充填した後、小石を敷いている。小石は南の列に残りがよい。北の方は部分的に小石がある。この小石は上部に礎石をおくための、地盤石と考えられる。礎石建物の跡である。小石の下部の褐色土にはAs-Aが入っており、近世後期のものであろう。

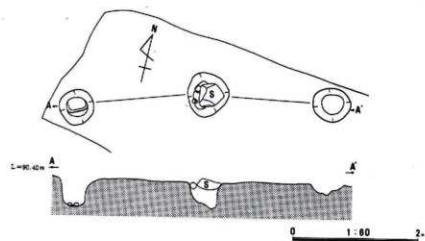
SB8 II区で検出した。南方は残りがよいが、北方は擾乱されている。2間×2、ないし3間の掘立柱建物であろう。南西の1本を除いて、柱穴の掘り込みは比較的浅い。柱穴にはAs-Aが混入する褐色土であった。近世後期と考えられる。



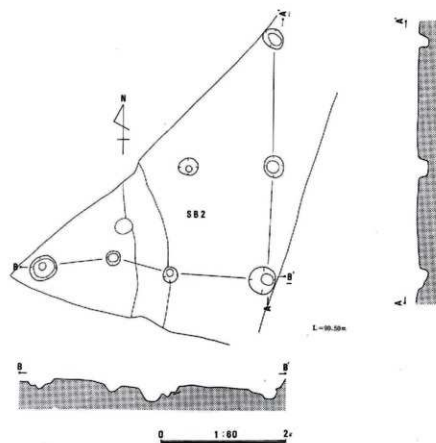
第23図 SB1



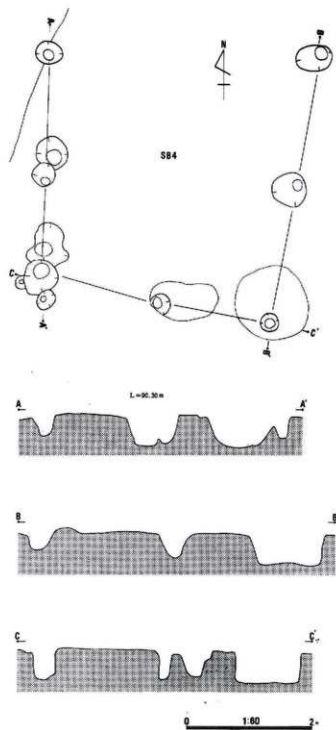
第24図 SB2遺構図



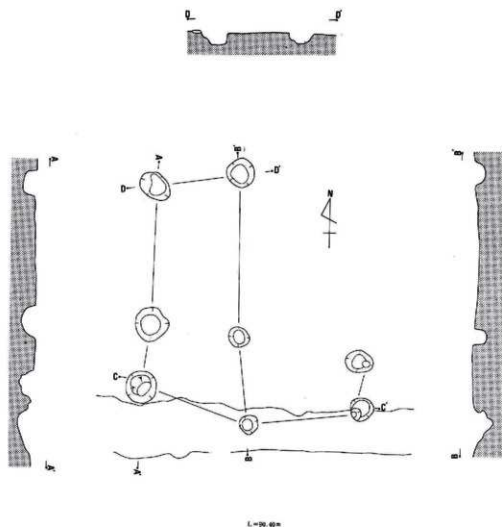
第25图 SB 3 遺構図



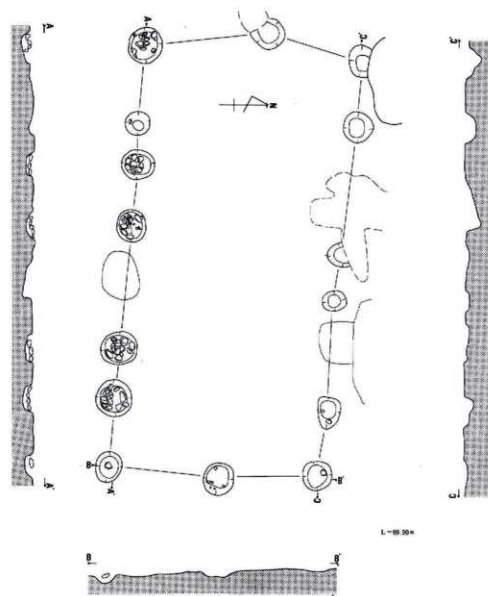
第26图 SB 5 遺構図



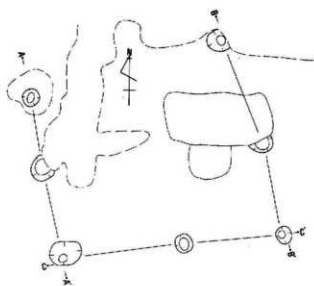
第27图 SB 4 遺構図



第28图 SB 6 透视图

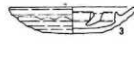


第29图 SB 7 透视图



0 1.50 2

第30図 SB8遺構図



0 1.3 10

第31図 遺物図

器種	調査・写真番号	法量 cm (推定)	形態・調整の特徴	備考
丸碗	P13-1	口径 (11.9) 器高 7.9 高台径 5.3	腰部にやや張りがあるが全体にまるみをもち、削り出し高台、口縁口がはつきりして、へこんだ部分には輪が浅い。上からのふれ、鉄輪、高台あたりは磨粉である。	SD2 17世紀~18世紀はじめ。瀬戸式鉄系陶器。1/6
菊皿	P13-2	口径 (13.0) 器高 (3.5) 高台径 (7.2)	口縁部は丸くカットされる。体部内外面はへら削り。見込み部に2本の凹線。底面は鉄輪で掛け。	SD2 17世紀中ごろ。瀬戸式鉄系陶器。1/2
碗	P13-3	高台径 (6.4)	がっちりした高台、削り出し高台、外面底部付近はへら削り。内外面鉄輪。	SD2 17~18世紀はじめ、肥前系陶器。
丸碗	P13-4		丸みをおびた体部、鉄輪。	SD1 17~18世紀はじめ、瀬戸式鉄系陶器。1/6
丸皿	P13-5	口径 (12.0) 器高 (2.2) 高台径 (8.0)	削り出し高台、口縁丸くおさめる。体部外面中央から下部はへら削り、長石輪。底面外面は鉄輪。	SD2 17世紀前半、瀬戸式鉄系陶器、灯明皿？ 1/3
碗	P14-1	口径 (12.0)	大振りな碗、付け高台。内外面鉄輪を施す。細かい貫入がある。	SD2 17~18世紀中頃、肥前系陶器。
鉢	P14-2	口径 12.0 器高 (7.6) 底径 (5.0)	高台は小さいが高い。大振りな碗、付け高台。内外面鉄輪、高台底部鉄輪。こまかい貫入がある。	SD2 17~18世紀中頃、肥前系陶器。
碗	P14-3	高台径 (4.9)	大きく開きぎみな高台。内外面鉄輪、高台底部鉄輪。	SD2 17世紀後半、肥前系陶器。1/3
丸碗	P14-4	高台径 4.9	体部下方はややはるが、全体に丸い。削り出し高台。体下部にへら削り調整。鉄輪掛け付け。	SD2 18世紀中頃。瀬戸式鉄系陶器。
鉄結碗	P14-5	口径 (10.0)	丸みをおびるがやや浅い。外面中央から下方にかけて深い沈没。上部鉄輪、下部鉄輪かけ付け。	SD2 18~19世紀、瀬戸式鉄系陶器。
磁器碗	P14-6	口径 (10.9) 器高 (4.5) 高台径 (4.0)	小さい高台、厚く丸みをおびた体部。貝原鉄。	SD2 18世紀、肥前系陶器、くらわんか手。1/4

器種	調査・写真番号	法数 (推定)	形態・調整の特徴	備考
磨鉢	P14-7	底径 (10.4)	平底、体部大きく開く。紐つくり後、口クロ調整。内面にくし目がすまなく落ちる。内外面磨蝕	SD2 産地不詳。施釉、内面使用痕、1/10
ホウロク	P14-8	口径 (37.2) 器高 6.1	器肉が厚く、底がたいら。紐つくり後、口クロ調整。外面はヘラズリ。	SD2 鉄質陶器、1/20
鉢	P14-9		大きく広がる鉢。口縁横に広がる。紐つくり後、口クロ調整。	SD1 鉄質陶器、内面タテ方向に磨蝕、調理具、1/6
粉挽臼	P15-1	直径 34.5 高さ 10.9	上臼、中央に芯棒受け。供給口は円形。	SD1 かなり使われて、摩滅している、1/2
鉄線皿	P16-1	高台径 (9.0)	浅い皿、体部下方に浅。削り出し高台。灰釉、鉄線。見込み部に重ね焼きの跡(門扉ピン)	SD6 17世紀前半、瀬戸美濃系陶器、1/3
碗	P16-2	口径 9.0 器高 3.4 高台径 4.2	小ぶりの碗、削り出し高台。内外鉄線。高台部分は釉がない。	SD6 17世紀後半、瀬戸美濃系陶器 完形。
磨鉢	P17-1	口径 34.0	口縁外側に3段、溝に腰目が入る。紐つくりの後調整。	SD11 硬質 産地不詳、1/20
碗	P18-1	口径 (11.4)	体部丸みをもちながら直立気味。内外灰釉施釉、細かい貫入。	SK1 18世紀、肥前系陶器。
碗	P18-2	口径 (8.0)	小ぶりの碗、面磨、コンニャク印判か。	SK1 肥前系磁器、1/4
碗	P18-3	高台径 (4.0)	高台小さい。体部厚く丸みをもって立ち上がる。呉須絵。	SK1 18世紀、肥前系磁器。
醬口	P18-4	口径 (7.6)	筒形、口縁にむかってすこし開く。呉須絵。	SK2 18世紀、肥前系磁器。
徳利	P18-5	底径 (6.3)	底部、上げ底ぎみ、口クロ調整。外面磨蝕	SK2 陶器、18~19世紀。
碗	P27-1	口径 (11.0)	丸みをもった碗、体部下方にかけて厚くなる。呉須絵。	磁器、V区、1/8
碗	P27-2	口径 (10.2)	やや丸みをもつ。体部下部はやや厚手。呉須絵。	磁器、表採、1/6
灯明皿	P27-3	口径 (10.2) 器高 (2.1)	灯明皿の受け皿。切り込みをもつ。内外磨蝕、外面、体~底部は無釉。外面、ヘラズリ調整。	18~19世紀、瀬戸美濃系陶器。表採。



SD 8 南から



SD 8 全景(弥生中期環濠) 北から



SD 8 南から



SD 8 南から



V区SD 8終点 南から



SD 7(中世)北から



SB 3礎石 南から



SD 1 石白出土状態 北西から



SD 1 北から



II 区全景



SD 6 西から



SK 2(墓) 南から



SD 2、柱穴のならびはSB1 南から



SD 2 北から



SB 7、SB 8(手前) 北から



SB 7 礎石下地栗石



SD 2、SD 3 北から



手前はSB4、奥はSB2



左からSD1、右がSB7



SB 7、SB 8 実測風景



SB 2 北から



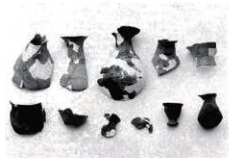
SK 1 北から



SB 5 北から



SB 6 南から



7-1 6-3 6-2 7-2 6-6



8-4 6-5 8-4

8-7

8-8

8-10 8-9

7-4 8-1 6-2 8-2 7-5 7-3

8-3 8-6 8-11 8-5



P 6-2 壶



P 6-3 壶



P 7-2 壶



P 7-5 台付甕



P 7-3 小形壶



P 7-4 甕



P14-8 P12-1 P12-2

(SD 2) (SD 7) (SD 7)



P14-6 P27-2 P18-4

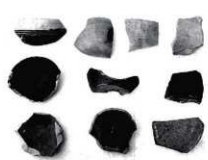
(SD 2) (表採) (SK 2)

P14-9 P17-1 P14-7

(SD 1) (SD 11) (SD 2)

P27-1 P18-2 P18-3

(V 区) (SK 1) (SK 1)



P14-5 P18-1 P14-1 P14-3

(SK 2) (SK 1) (SD 2) (SD 2)



P13-2 P27-3

(SD 2) (表採)

P16-2 P18-5 P13-4

(SD 6) (SK 2) (SD 1)

P13-1 P14-2

(SD 2) (SD 2)

P13-3 P14-4 P13-5

(SD 2) (SD 2) (SD 2)

高崎市文化財調査報告書第116集

高 関 堰 村 道 跡

1992年3月 印刷

1992年3月 発行

編集者 高 崎 市 教 育 委 員 会
文化振興課埋蔵文化財係

発行者 高 崎 市 教 育 委 員 会
印刷所 野 島 印 刷 有 限 会 社